

中国語学科メディア教材プロジェクト2006

（上海の港湾と貿易、そして生活）

外国語学部 中国語学科4年 源元 圭吾

2006年9月、外国語学部中国語学科、孫安石ゼミ3、4年生と有志の学生数名、合計18名で、毎年恒例となりつつある、上海メディア教材プロジェクトを製作するために上海へと向かった。メディア教材プロジェクトとは、中国

についてより深く知るために様々な場所を訪れ、インタビューをし、各班が15分程度のビデオを作成するものである。2003年度のテーマは「中国の英語教育と大学生の生活」、2004年度は「上海のゴミ事情」、2005年度は「上海、人口1500万人の胃袋を支える市場」、そして2006年度のテーマは「上海の港湾と貿易、そして生活」ということで、中国の中でも今一番発展している上海の港や、貿易、さらには人々の生活に密着し、映像に残し、インタビューすることが今年の目的である。1班

は「洋山深水港と国際貿易」、2班は「黄浦江と上海の産業」、3班は「上海の日常生活」というテーマで調べていくことになった。

事前準備／横浜の港を訪れて

上海での調査の前に、上海での行動や、ビデオカメラの扱い方などの事前学習を兼ねて「日本郵船コンテナターミナル・埠頭供給公社の大黒埠頭」を訪れた。横浜港は本牧・大黒・南本牧埠頭に合わせて21（うち公社ターミナル10）のコンテナターミナルを備えており、公社が管理するターミナルは特定の船社に対して専用貸しをするため、借り受け者のニーズに合ったカスタマイズが可能であり、貸付料も固定であるため利用すればするほど、荷役にかかるコストが押さえられている。



公社が管理するターミナルは最新鋭の機能を誇っており、大黒埠頭のC-3・4号、南本牧MC-2・2号ターミナル岸壁延長350m・奥行き500mであり、国内最大のコンテナターミナルとなっている。また、南本牧頭では世界最大級のコンテナクレーンが5基設置されており、横浜港のクオリティの高さを象徴するものである。1859年の開港以来、約140年の歴史を誇る横浜港。横浜港は日本におけるメインポートとして充実した機能を有しており、世界に欠かなく延びる航路網は、横浜港の歴史と経験の厚みを物語るものであった。

上海の港について知る前に、横浜の港を知ることとはとても貴重な体験であった。まずは日本の港事情を知ってから上海に行くことにより、日本と違うところや、日本にはないことなど、横浜と上海の違いが分かるに違いない。上海が待ち遠しくなった。

上海の日常生活

古き良き上海

私はこのメディア教材プロジェクトに



参加するのは今回で2回目になる。去年も参加したが、今年のテーマは頭を悩ますものであった。私が担当する班は3班の「上海の日常生活」についてである。上海のどの場所を撮影すれば日常生活がうまく表現できるのであるのかと考えた。上海は現在、上海万博に向けて急速に発展している。これでもか！というくらいの高層ビルが立ち並んでいる。しかし、その裏では古い建物が壊されている。その古い建物にはもちろん住民が住んでいる。その住民はどこにいるのか？ また住民はどのように考えているのか？ 住民の声を追いつつ、上海の変化に注目していくことにした。

上海万博に向けて

住民の声、そして若者は？

先にも述べたように上海は今、多くの高層ビルが立ち並んでいる。これは上海万博に向けての準備ともいってよい。高層ビルを建設中の真正面には古くからの住宅街がある。住宅街に住んでいる人に話を聞くと、建設中の高層ビルは元々古い住宅街であり、さらには真正面にある古い住宅街も取り壊され、話を聞いた住民も近いうちに出て行かなければならない。このような事態を聞き、私は一大イベントに向けてやり

すぎではないかとさえ思った。このような、古い住宅街が取り壊され、新しい高層ビルが建設される場所を幾度となく目にした。

このような場所を何ヶ所か回り、撮影、インタビューをおこなった。そこで王さんという人に出会った。彼は二階建ての家に住み、1階を餃子屋にし、経営している人である。彼の話を聞くと、この家も餃子屋も9月いっぱい取り壊されるとのことである。もう契約もしており、他のマンションに引っ越さなければならないのである。これは政府からの命令であり、やむを得ないことである。また、立ち退き代金や、引越し代なども貰っている。しかし、政府から支給された金額を全額もらうことはできないという。仲介手数料などをとられ、役人からピンハネされるという。自ら選んで引っ越すわけでもない。また、自分が過ごした家が失われる。それにも関わらず支給された金額を全額もらうことができないという事態である。しかし、彼は「仕方ない。本当は嫌だけど」というような言い方しかなかった。また、他の住民たちの声で一番多かったのが「古くからの知り合いと離れるのが寂しい。近所付き合いがなくなるのが寂しい」という声であった。また、生まれ育った場所を離れたくない。生まれ育った場

所がなくなることにも寂しさを感じていた。最後に王さんが、嬉しそうに友達を紹介してくれた。彼らとも離れなければいけないことがとても寂しいのであった。

これに対して若者達はどうに思っているのだろうか？ 豫園で働く人たちにインタビューしてみた。すると住民達とは違う意見が出てきた。「近代化には賛成である。もっと新しい建物を建設してほしい」というようなものである。この意見は妥当だと思う。私も、もしインタビューを受けたら、そのように答えるであろう。近代化を賛成する若者と古いものを残してほしい住民達。住民達の事情も知っているだけにどちらにも一票いれたいところである。しかし、今の上海は近代化を進め、古い建物を壊し、新しい建物を建設し、上海を世界にアピールしている。上海万博に向けて住民の声が無視しているかのようにも思えた。

これからの上海2010年に向かって

これからの上海はどのようなようになっていくのだろうか？ ふと考えるときがある。中国では2008年には北京オリンピック、そして2010年には上海万博が控えている。上海万博は今から3年後である。私達が上海を訪れたのは

2006年9月であったが、その時ですら建設ラッシュであった。

高層ビルが建設され、近代化が進み、世界から注目されるようになった今だからこそ、もう一度原点に戻らなければならないと思う。世界に追いつき、追い越そうと考えるだけでなく、もっと大事なことがあるのだと思った。大事なことで何なのか。それは、ただ建設に反対し、高層ビルを建設しないことや古いものだけを残すことなのか。うまく言うことはできないが、上海に訪れ、上海のことを考えていくうちに、自分にとっての大事なことも考えさせられるようになった。

去年と全く違った視点から見た上海であったが、やはり魅力的であった。違った角度から見るということはこういうことではないだろうか。あの熱気満ちた南京路、その一歩抜けた路地裏には今から何かが起きそうな感じである。華やかなバンド、世界を見ることができると世界のような誰かが知っている場所だけでなく、さまざまな場所を見ることができた。そして、まだまだ知らない上海があることも分かった。大学に入学してから、毎年上海を訪れているが、毎年変化している。私はいつ何時も変化している上海が大好きである。今度はどのような変化

を見せてくれるのかは、上海を訪れたときのお楽しみにしておこう。

